

ぶ け せい けん こう けん ほ こ た か とう ご く む しゃ
武家政権づくりに貢献した誇り高き東国武者

ち ば つね たね こう

千葉常胤公 ものがたり

みなものより とも
源頼朝をして

「父」と

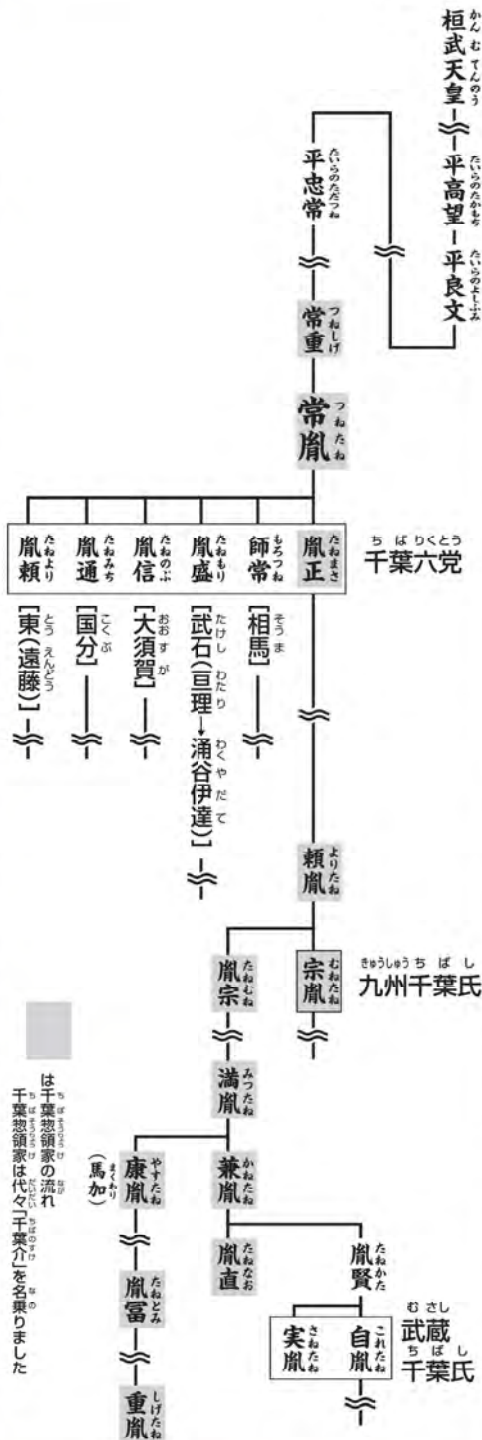
よばしめた男
おとこ



千葉氏関係の系図・年表

千葉氏系図

いちぶ抜粋
(一部抜粋)



年表

- 1118年 (元永元) 千葉常胤生まれる。平清盛生まれる。
- 1126年 (大治元) 千葉常重、常胤、千葉に館を構える。
- 1167年 (仁安2) 平清盛が太政大臣となる。
- 1180年 (治承4) 源頼朝挙兵するも、石橋山の戦いで敗れ、房総半島へ逃れる。常胤、頼朝に応じる。鎌倉入府。富士川の戦い。常胤、源頼朝の上洛を止める。
- 1183年 (寿永2) 上総広常、頼朝に滅ぼされる。
- 1184年 (元暦元) 常胤、平氏追討のため源頼朝に従い、西国に出発する。
- 1185年 (元暦2) 壇ノ浦の戦い、平氏滅亡。
- 1189年 (文治5) 常胤、東海道大將軍として、奥州合戦に参加する (奥州藤原氏滅亡)。
- 1190年 (建久元) 常胤、頼朝の上洛の後陣を任される。
- 1199年 (正治元) 源頼朝死去。
- 1201年 (建仁元) 常胤、84歳で死去。
- 1221年 (承久3) 承久の乱 (後鳥羽上皇の討幕失敗)。
- 1274年 (文永11) 文永の役。頼胤が九州の地で戦死。宗胤が肥前に留まり、九州千葉氏の祖となる。
- 1331年 (元弘元) 後醍醐天皇の討幕計画失敗。護良親王、楠木正成などが挙兵。
- 1333年 (元弘3) 鎌倉幕府滅ぶ。
- 1334年 (建武元) 建武の新政始まる。
- 1338年 (延元3・暦応元) 足利尊氏が征夷大將軍となる。
- 1455年 (康正元) 馬加康胤らが千葉城を攻め、胤直は自害。胤直の甥、実胤、自胤は武蔵に逃れ武蔵千葉氏の祖となる。
- 1467年 (応仁元) 応仁の乱、戦国時代に入るとなる。
- 1484年 (文明16) このころ、馬加千葉氏が本佐倉城を本拠とする。
- 1538年 (天文7) 第一次国府台合戦
- 1563年 (永祿6) 第二次国府台合戦
- 1566年 (永祿9) 胤富、下総に攻め込んだ上杉謙信を退ける。
- 1573年 (元龜4) 足利義昭追放、室町幕府滅ぶ。
- 1585年 (天正13) 豊臣秀吉が関白に就任する。
- 1590年 (天正18) 豊臣秀吉の小田原攻めにより千葉惣領家は滅ぶ。

※この冊子内の年齢表記は全て数え年です。

おも とう じょう じん ぶつ
主な登場人物



源頼朝 (1147-1199)
 義朝の子。平治の乱で平氏に敗れて伊豆に流されました。1180年平氏打倒のため挙兵し、千葉氏などの助けをかりて武家政権（鎌倉幕府）を立てました。



千葉常胤 (1118-1201)
 常重の子。頼朝に味方して源平合戦などを戦い、鎌倉幕府の成立に大きく貢献しました。このため千葉氏は大きく発展しました。



源範頼
 頼朝の弟。頼朝に従って、源義仲・平氏を追討し、平氏滅亡後は九州を平定しました。



源義朝
 頼朝の父。保元の乱で活躍しましたが、平治の乱で平清盛に敗れ、東国へ逃げる途中で討ち取られました。



千葉胤頼
 常胤の六男。京で警護の仕事をしていたので、京の情勢を常胤や頼朝に伝えていました。



千葉胤正
 常胤の長男。源平合戦、奥州合戦に常胤を助けて参加しました。常胤の跡を継いで千葉氏の惣領になりました。



平清盛
 平氏武士団を率いて、保元、平治の乱に勝ち、朝廷内での地位を固め、全国に力を及ぼしましたが、源平の争いが本格化する前に死去しました。



上総広常
 房総平氏惣領家のかしらであり、東国最大級の勢力を誇っていました。広常が加わったことで頼朝挙兵が成功したとも言われています。



千葉常重
 常胤の父。緑区大椎に本拠を構えていたときに大椎を名乗っていましたが、中央区亥鼻付近へ本拠を移し千葉を名乗ったと言われています。



平高望
 桓武天皇のひ孫。889年頃平の名をもらい、上総介として京から関東にやって来ました。子孫は南関東一帯に広がり、千葉氏もその一つです。

和田義盛
 頼朝の挙兵に参加しました。源平合戦、奥州合戦に従軍して活躍しました。

安西景益
 頼朝が房総へ逃れてきた後、頼朝を助け、源平合戦を戦いました。

安達盛長
 頼朝が伊豆にいた時からの家来です。石橋山の戦いの後、共に房総へ逃れ、常胤を味方へつけた人物とされています。

今から
1100年以上も前のこと
(平安時代前期)



この漫画の主人公
千葉常胤公はどのような
人物でしょうか

第1章
武士の起こりと千葉氏



平高望の子孫は
地元の有力者と結婚して
房総の地で勢力を
広げていきました



桓武天皇¹のひ孫・
平高望²(高望王)が
「上総介²」という役目で
京の都からやって来ました

平高望



馬の生産



製鉄



荒地の開墾

彼らは荒地を田畑にしたり
鉄を作ったり馬を育てたりしました

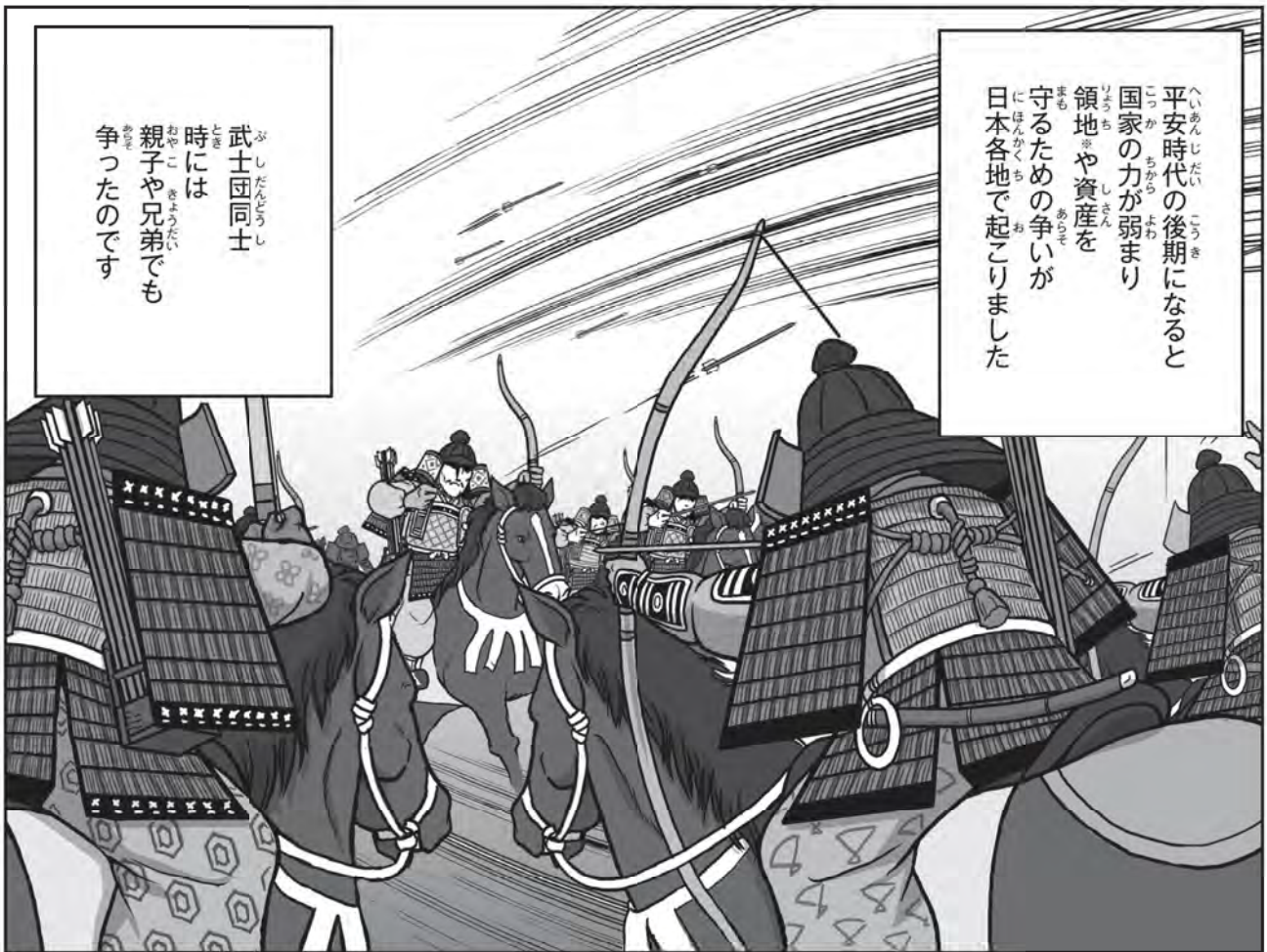
※1 桓武天皇：737-806。平安京に都を移した天皇です。
※2 上総介：上総の国(千葉県中部)の実質的な長官でした。



後の千葉氏も
その中のひとつです



こうして
房総各地で強大な力を
築き、武士団を形成
していったのです



武士団同士
時には
親子や兄弟でも
争ったのです

平安時代の後期になると
国家の力が弱まり
領地や資産を
守るための争いが
日本各地で起こりました

※領地：武士などが所有し支配する土地のことです。



房総の
武士団の多くは
源氏との結びつきを
深めました



武士の名門である
源氏や平氏と
主従関係を
結ぼうとしました

彼らは
より有力な武士と
結びついて自らの
立場を有利にしようと



常重の子・常胤は18歳で
父の跡を継ぎましたが
この後、大きな時代の流れに
巻き込まれていくことになるのです

1126年6月1日
平高望の子孫・常重は
本拠を大椎から千葉に移し
初めて「千葉」を名乗ります
千葉氏の誕生です
そして千葉の町の
始まりでもありました

千葉 常胤 (当時9歳)

千葉 常重

※主従関係：「主人」と「従者 (=家来)」の関係です。
主人が家来の土地支配を認め (ご恩)、家来は主人に尽くします (奉公)。



義朝殿 この戦
我々にお任せ
ください！

つねたね どうじ さい
常胤 (当時 39 歳)



頼りにして下さ
ぞ
千葉常胤殿！

みなもと
源 義朝



保元の乱^{※1}
(1156年)

常胤は源義朝に従って
この戦に加わり
さらに源氏との結びつきを
深めました

源



無念だ
……



その後起こった
平治の乱^{※2}(1159年)で
源義朝は平清盛らに
敗れてしまいます

※1 保元の乱：天皇家、藤原氏の権力争いに、源氏と平氏の武力が関わった戦争です。
源義朝と常胤が味方した側の勝利に終わりました。

※2 平治の乱：保元の乱の後で対立が深まった、源氏と平氏の争いです。常胤は参戦しませんでした。



殿！このままでは
われ一族の未来は
ありません



この戦で敗れた
源氏側に味方した千葉氏は
領地の一部を失うなど
房総での勢力を弱めていきました



わかっておる
……



一方、
平清盛が率いる平氏は
絶大な勢力を
誇るのです

平 清盛
たいらの きよもり

※1 流罪：刑罰の一つで、罪人を遠く離れた地や島に送る「追放刑」です。
 ※2 後白河天皇：1127-1192。源平の争乱期に、朝廷の権力を保ちました。



みなもとの よりとも
 源 頼朝
 どうし
 (当時 14 歳)

源義朝の子・頼朝も
 平治の乱に参戦しましたが
 年齢が若かったこともあり
 死罪にはならず、罰として
 京の都から遠く離れた伊豆に
 流罪^{※1}となりました



頼朝様は
 平氏と戦わない
 のですか？



みなもとの よりとも どうし
 源 頼朝 (当時 34 歳)

それから20年の月日が流れ：
 後白河天皇²の皇子・以仁王³が
 平氏への不満を募らせ
 ついに決起します
 頼朝の元にも参戦を求め
 手紙^{※4}が届きました…

うーむ
 どれほどの者が
 味方してくれようか…



※3 以仁王：1151-1180。後白河天皇の皇子(天皇の息子)。平氏を打ち取る計画をたて、全国の源氏に兵を挙げて戦うように命令を出し、自らも拳兵しましたが、その戦いで亡くなりました。
 ※4 手紙：令旨といって、皇族が出す命令書でした。



はっ

お通しいたせ

なんと
あの千葉常胤の六男か



殿の
千葉胤頼殿が
訪ねて参りました



頼朝様…
千葉胤頼に
ごびいます

京の都からの帰りに
立ち寄りしました*

千葉 胤頼



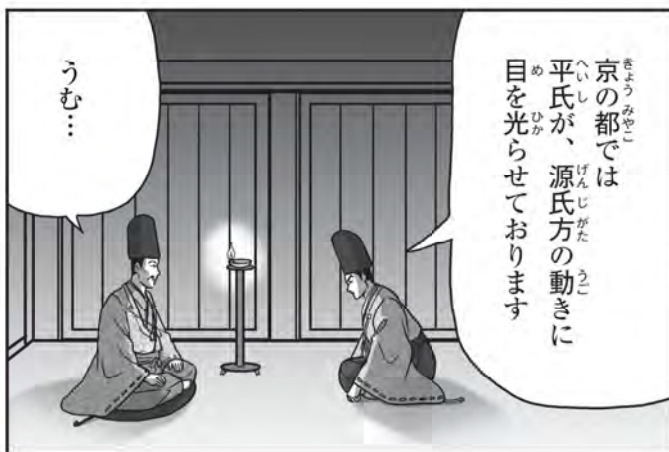
危険がすぐそこまで
迫っております！

源氏の嫡流である
頼朝様のお命も平氏に
狙われております



そうか
話を聞こう

秘密にお知らせ
したいことが
ございます



うむ…

京の都では
平氏が、源氏方の動きに
目を光らせております

※1 このとき、三浦義澄も一緒に頼朝を訪れています。

※2 嫡流：一族の直系の血筋のこと。主に惣領（跡取り）と正妻の間に生まれた長男によって継がれる血筋を意味します。

やはりそうであったか
わがわざ知らせて
くれて礼を申す

はっ



では
私はこれから
父のもとに
戻ります

えっか...



戻られたら
千葉常胤殿に
伝えてくれ

はっ

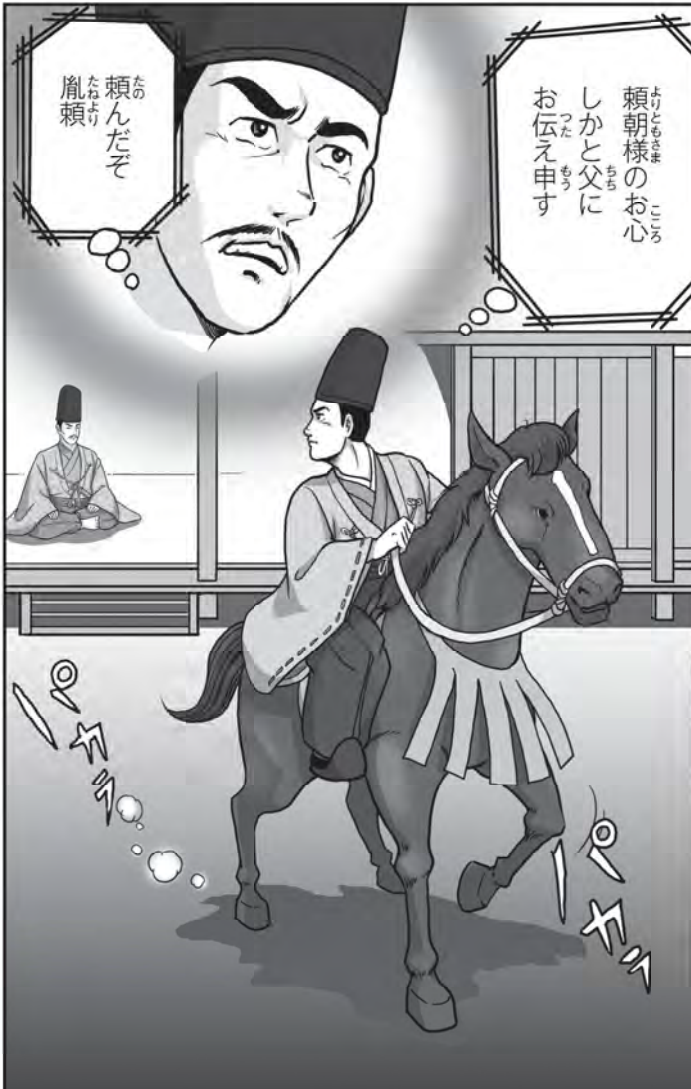


頼朝は
負けぬとな...



頼朝様のお心
しかと父に
お伝え申す

頼んだぞ
胤頼

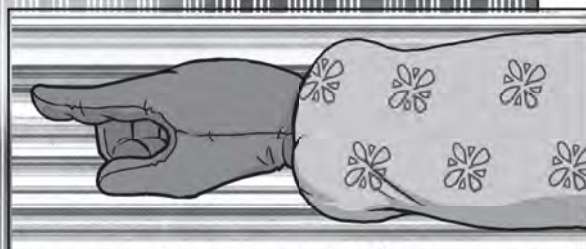


この方は
あきらめて
おらぬ



第2章 頼朝の拳兵

1180年8月
源頼朝はついに拳兵し
平氏方と合戦になります



相模国・石橋山 (今の神奈川県小田原市)

※合戦・8月17日に頼朝は拳兵し、伊豆自代(代官)山本兼隆を討ちました。その後、相模国の石橋山で平氏方(大庭景親)と対しました。

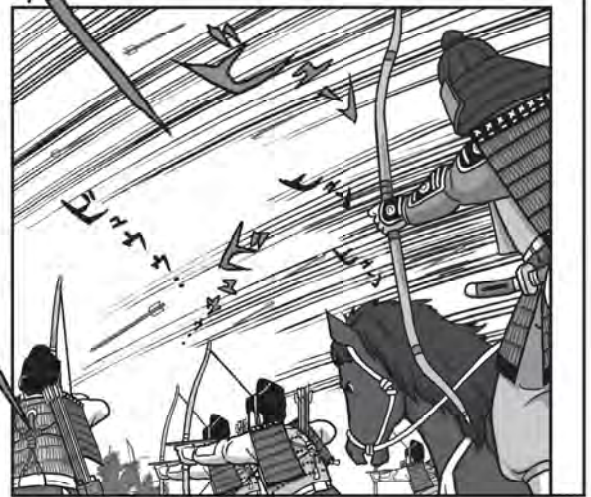
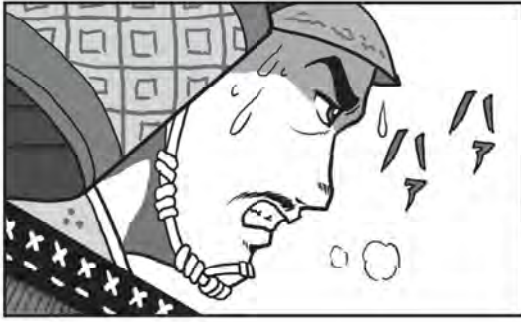


源頼朝 (当時 34 歳)



殿、平氏方の軍勢です







殿、一時身を
ひそめましょう！



またも
敵兵です

雨のために
援軍が来なかった不運も
重なり

10倍もの兵力を前に
頼朝は退却せざるを得ませんでした





さがみのくに まなづる
相模国・真鶴
いま かながわけんせいぶ
(今の神奈川県西部)

この先の海岸に
舟を用意いたしました



皆の
おかげじゃ

殿
どうにか
逃げ切りましたな



ここから
房総へ向かい
ましようぞ

うむ



房総で再起を
図ろうぞ！



多くの兵を失ってしまったが、ここであきらめるわけにはいかぬ！



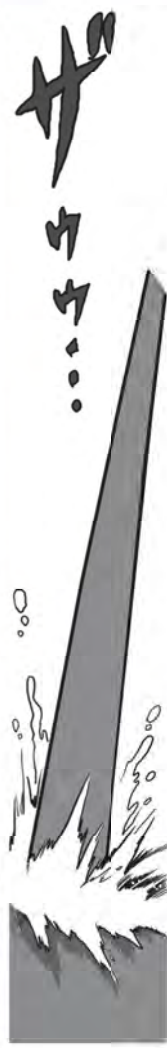
千葉常胤、
上総広常が
力を貸して
くれれば：

かすき ひろつね
上総 広常

ちば つねたね どうじ さい
千葉 常胤 (当時 63 歳)



よりとほ さいき
頼朝は再起を期して
うみわた せ
海を渡ったのでした



ザッザッ...



さあ
みなもの
皆の者
行くぞ！

第3章 頼朝と常胤

頼朝は
わずかな従者と共に
房総半島に辿り着きます※



しかし頼朝の
首を取って名を
上げようとする
豪族は数多く…



殿
ここはいったん近くの
安西景益の館に
身をお隠してください



うむ

安西景益の館



殿
お呼びでしょうか



安達 盛長

その方たちには
千葉常胤を
訪ねてくれ

はっ！



※頼朝が辿り着いたのは、房総半島南部（現在の千葉県銕南町もしくはは館山市）だと言われています。



源頼朝の家臣
安達盛長と申す
千葉常胤殿に
お会いしたい

しばし
お待ちください



千葉常胤殿の館に
ようやく着いたぞ



主人の使いで
参上いたしました



殿が
お待ちでございます
こちらへ



ご使者
ご苦労でござった
千葉常胤と申す
こちらは我が息子
胤正、胤頼にござる

たねまさ
胤正

たねより
胤頼



父・義朝を
助けた時のように
そなたの力を貸して
ほしい、と



千葉常胤殿
我が主人からの
頼みでござる

むっ



.....



頼朝様のお気持
しかと
受け止め申した



父上
いかがなされた
ご返答を！

むっ



いち早く
お声を掛けていただき
我ら千葉一族
誇りに思います



この時、常胤は
頼朝が自分を真つ先に頼ってくれたこと
そして平氏の力に押されて
辛い思いをしてきた千葉氏が
源氏の再興によって勢いを取り戻す
機会が訪れたことに感動し
しばらく言葉が出ませんでした



そのお言葉
主人も喜ぶことでしょう
お礼を申します

後日
こじつ



千葉常胤
ちちはつね
さんしょう
参上しました



恐縮で
おこぼる

早速ひと働き
さつそく
してくれたようじゃのう



早速ではありませんが
頼朝様にひとつ提案が
ござる 鎌倉に拠点
築かれてはいかが
でしょうか？

鎌倉とな？



あいわかった！

まさに源氏再興に
ふさわしい場所
鎌倉を目標しましょうぞ



鎌倉は
源氏に
縁のある土地

それに山と海に
囲まれていて
敵が攻めにくい

※ひと働き：頼朝と面会する前に、平氏側の勢力であった下総の目代（代官）を常胤が討ち取ったことを指します。



そなたを
父のよう
に思
う！



老
齡
な
が
ら
常
胤
は
献
身
的
に
頼
朝
に
仕
え
心
の
支
え
と
な
り
ま
し
た



あ
り
が
た
き
幸
せ
！

ふ
た
り
は
日
々
其
の
絆
を
強
く
し
て
い
く
の
で
し
た



ご助力を
お願い申す！



頼朝は上総広常のもとへも
使いとして和田義盛を
向かわせました

和田 義盛



うーん味方をした
気持ちはあるが
すぐには…



広常を
待っていられぬ
いざ出陣じゃ！

なかなか
動かない広常に
しびれを切らした
頼朝は…



上総広常はとても
慎重ですぐに頼朝に
味方するべきか
決めかねていました



これだけの
大軍で来たのだ
頼朝様もほめて
くださるだろう



ところが…
今頃遅れて
来るとは何事か！
恥を知れ！



これに驚いた広常は
常胤の軍の何十倍もの
大軍を率いて頼朝のもとへ
駆けつけました



これをきつかけに
頼朝軍は
勢力を拡大しながら
常胤の進言どおり
鎌倉に入り
そこを拠点とします



広常は
頼朝の強い決意を知り
畏敬の念を
抱いたのでした

ははあつ…
申し訳ござらぬ…

※畏敬の念：偉大な人をおそれうやまう気持ち。

この動きに清盛は激怒し
追討の兵を差し向けました

源氏など
ひとひねりじゃ

頼朝軍は
それを迎え討つため
西に向かい
富士川の戦いで
平氏方の軍勢を
退けました



よし！
このままの勢いで
京の都を目指すぞ！



常胤
なぜ止める？

まず関東を
まとめることが先決！



お待ちください！



※富士川の戦い：1180年10月。富士川（静岡県東部を流れる川）を挟んで源平両軍が向かい合っていました、夜中の水鳥の羽音や、舟のかがり火に驚いた平氏が戦わずに逃げたことが知られています。



第4章 常胤の活躍

1182年8月
源氏と平氏の戦いは
東と西でにらみ合いが
続いていました

さがみのくに かまくら
相模国・鎌倉
いま かながわけんかまくらし
(今の神奈川県鎌倉市)



まだまだ
気が休まりませぬな

うむ



そなたと
6人の息子に
万寿の七夜の儀※を
任せたい



ところで
先ほど誕生した
我が子・万寿(頼家)
のことだが



※七夜の儀：子どもの誕生をお祝いする儀式のうち、生まれてから七日目の夜に行う儀式のこと。
親族や縁者が、食物や衣服、道具や家具などを贈ります。



跡継ぎの大事な儀式を任されるほど常胤は頼朝の信頼を得ていました



これぞ一族の誉れ！喜んでお引き受けいたします！



範頼様と共に戦いましょうぞ！

いちのたに いま ひょうごけんこうべし
一ノ谷 (今の兵庫県神戸市)

源 範頼



やがて源氏と平氏の戦いは本格化し常胤も休むことなく戦います



平氏との戦はまだまだこれからじゃ！

※一ノ谷の戦い：1184年2月。今の兵庫県神戸市で行われた源平の戦い。源義経、範頼が率いた源氏方が勝利しました。

※1 壇ノ浦の戦い：1185年3月。源平最後の戦い。この戦いで平氏は滅びました。
 ※2 奥州藤原氏。平安時代末期の約100年間、今の岩手県平泉町を本拠として東北地方を支配した一族。



その後、常胤は九州に残っていた平氏に味方する勢力を制圧しました



1185年 頼朝軍は西へ西へと逃げる平氏と壇ノ浦で決戦を行いついに平氏を滅ぼしました

壇ノ浦 (今の山口県下関市)



ははー！



そちを
 とうかいどうだいしやうぐん
 東海道大將軍に
 任命いたす

奥州(現在の東北地方)で権力を誇る藤原氏を攻める際には――



ご期待にお応えいたします！

奥州の合戦でも頼んだぞ

※3 東海道大將軍：頼朝は軍勢を大手軍・東海道軍・北陸道軍の三軍に分けて奥州藤原氏を攻めました。
 このとき常胤は東海道軍の大將を務めました。



※武家政権：武家のかしらをたばね、 支配するしくみのこと。



上落^{じょうらく}いたす折^{おり}には
その方^{ほう}に後陣^{こうしん}を申しつける

は



それにしても
まったく老い^{おい}を
感じさせぬのう



常胤^{つねたね}
この度も見事^{みごと}な
働きぶりであった



殿^{との}の
お役に立^たてれば
幸せ^{しあわせ}でございます



後陣^{こうしん}を
任^{まか}されるのは
武家^{ぶけ}の誇^{ほこ}り

千葉常胤^{ちのへつねたね}は自他^{じた}ともに
認^{みと}める頼朝^{よりとも}の
最も重要な家臣^{かしん}でした

※1 上落^{じょうらく}：地方^{ちほう}から京^{みやこ}の都^{みやこ}に向^{むか}うこと。

※2 後陣^{こうしん}：軍隊^{いくさ}で、本隊^{ほんたい}の後ろ^{うしろ}に配置^{ちやう}した隊^{たい}のこと。後方^{こうほう}からの攻撃^{こうげき}に備^{そな}えるので、その役^{やく}はとても難^{むずか}しく、頼朝^{よりとも}の信賴^{しんらい}が厚^{あつ}かったことがうかがえます。

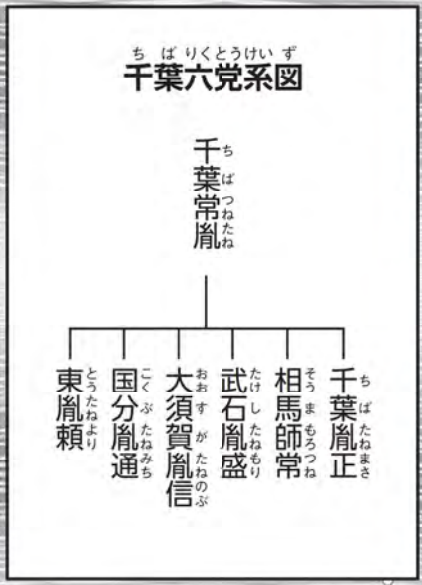


あの苦しかった時代から
およそ30年が経っていました

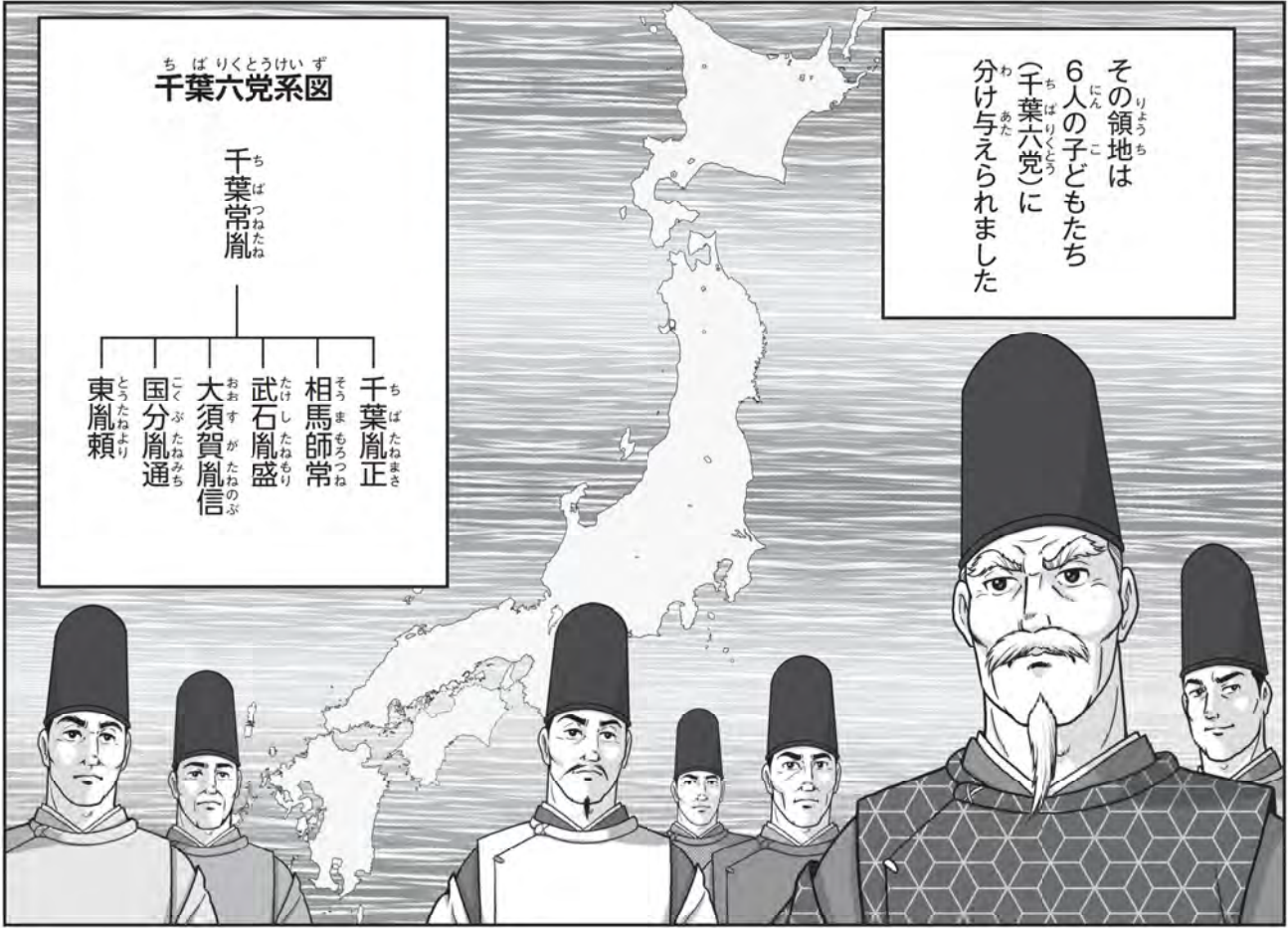
常胤の活躍で
千葉氏は驚くほどの飛躍を
遂げたのです



こうして常胤は
下総の本領以外にも
戦での貢献により
全国に領地を獲得します



その領地は
6人の子どもたち
千葉六党に
分け与えられました



1199年
源頼朝が
なくなり

後を追うように
常胤もなくなりました

享年84歳
当時としては
異例の長寿でした



常胤がなくなった後も
千葉六党は
鎌倉幕府を支え
その後数百年にわたり
繁栄しました



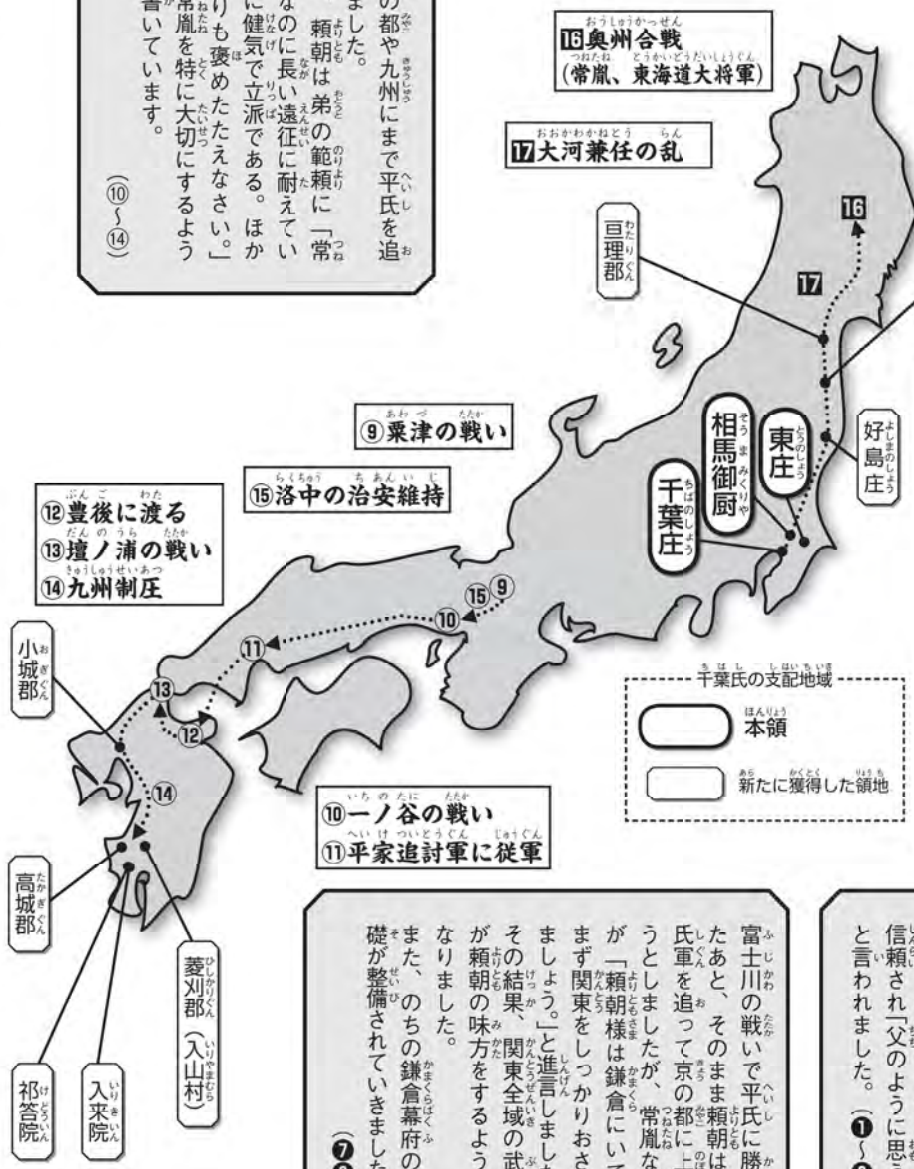
こうして
千葉の町の礎が
築かれたのです

つねたね ぜんこく かつやくけいろ 常胤の全国にあたる活躍経路

千葉氏は常胤の時代、源頼朝を助け鎌倉幕府の成立に大きく貢献しました。そして、現在の千葉市付近を拠点に全国各地に勢力を拡大し、幕府の中でも特に重要な一族となりました。千葉氏の飛躍のきっかけとなった源平合戦をはじめとした戦いと、新たに獲得した領地を紹介します。

常胤は京の都や九州にまで平氏を追って戦いました。そのとき、頼朝は弟の範頼に「常胤は高齢なのに長い遠征に耐えているのは特に健気で立派である。ほかの家来よりも褒めたたえなさい。」などと、常胤を特に大切にするような手紙を書いています。(10) (14)

常胤は、奥州藤原氏を攻めるため、東海道大將軍として、奥州合戦に参加しました。(16)



富士川の戦いで平氏に勝ったあと、そのまま頼朝は平氏軍を追って京の都に上ろうとしたのですが、常胤などが「頼朝様は鎌倉にいて、まず関東をしつかりおさえますしよ。」と進言しました。その結果、関東全域の武士が頼朝の味方をするようになりました。また、のちの鎌倉幕府の基礎が整備されていきました。(7) (8)

頼朝が平氏を倒すために兵を挙げましたが、石橋山の戦いで敗れ、房総半島に逃れてきました。頼朝が頼つたのが、上総氏と千葉氏でした。千葉氏の惣領(一族を代表してまとめ上げる人)、千葉常胤は頼朝の呼びかけにすぐに応え、一族を引き連れて頼朝と共に戦いました。その結果、頼朝に深く信頼され「父のように思う」と言われました。(1) (3)



わしは63歳のときに源頼朝様の奉兵を助け、息子や孫たちと一緒に平氏と戦ったのじゃ。源平合戦などでの活躍で全国各地に領地をもらったのじゃよ。

常胤の生き様と人物像



我ら鎌倉武士と一族のことを語ろうぞ。今のみんなの考え方と違うことも多いと思うが、その基礎になったものもあるのじゃよ。

「一所懸命」

我ら武士団にとつて、自ら開発して領地とした土地（本領）はかけがえのない大切なものじゃ。しかし、平氏の勢力が強まったころ、一部（相馬御厨）を失ってしもうた。この領地を取り戻すためには、何としてでも平氏を倒し、頼朝様のもので領地を認めてもらう必要があったのじゃ。自らの領地（二所）を精一杯の力を尽くして（懸命に）守り抜くという考え方が、みんなが現在使っている「一生懸命」という言葉のもとになったのじゃ。

「ご恩」と「奉公」

頼朝様に領地の支配を認めていただいた「ご恩」に応えるために、我らはそのお返しをする、それが「奉公」じゃ。わしも頼朝様の命令に従って全国で戦い、その活躍が認められて、本領以外にも全国各地に新たな領地をいただくことになった。これも「奉公」に対しての「ご恩」ということとなるのじゃよ。元寇のとき、わしの子孫が九州で戦ったのも幕府への「奉公」じゃ。一族が鎌倉時代・室町時代と約400年にもわたって繁栄できたのも、自分の主に精一杯の「奉公」を尽くした「ご恩」じゃと思うておる。

「名こそ惜しけれ」

あるとき頼朝様は、京都の貴族出身の家来たちを「常胤を見よ！お前たちとは比較にならないほど領地を持つておるが、慎ましく質実剛健な暮らしをしている。」と叱つたそうじゃ。武士にとつて大切なのは「弓馬の道」じゃ。「いざ鎌倉」というときに備え、日頃から武芸の技を磨き、うるたえることのない心を鍛えることが大切なのじゃ。服装の豪華さを褒められるなど恥ずかしさの極みじゃ。わしは、武士としての誇りにかけ、千葉の名に恥じぬような行動を心がけておつたのじゃよ。

「妙見信仰」

全国の千葉一族ゆかりの地を訪ねると、必ずと言っていいほど「妙見」様をまつた社に出会はずじゃ。妙見様は北極星・北斗七星を神様としてまつたものでな、我ら一族は妙見様の信仰を通じて深く結びついていたのじゃよ。我ら一族の紋章もそのことに由来することを知つておつたか？そして、全国の一族を束ねていたのが千葉に本拠を置く千葉惣領家であり、一族を精神的に束ねていたのが妙見様への信仰なのじゃ。

つねたね あと ちばし ねん あゆ 常胤なき後の千葉氏400年の歩み

(1) 鎌倉幕府の下で下総の守護を務め抜く

源頼朝の死後、北条氏の力が強まり有力な御家人が減ばされる中、千葉氏は下総守護を一貫して務めるとともに、全国に散在する領地の支配も続け、幕府内で高い地位を保ち続けました。鎌倉時代を通じて守護を務め抜いたのは千葉氏と下野守護小山氏のみでした。【鎌倉時代】

(2) 元寇でも大活躍した千葉氏

元寇の際には、幕府の命令により、九州に領地を持つ千葉氏も遠征し、元との戦いに奮戦しましたが、千葉頼胤は戦いの傷がもとで九州で死去。その子の宗胤は元の再来に備え九州に留まることになりました。【鎌倉時代中期】

(3) 千葉氏の分裂と九州千葉氏のおこり

宗胤が九州に長く留まる中、本拠の千葉では弟の胤宗の力が強まり、これ以後、千葉氏は千葉と九州とに分かれ対立することになります。そして、室町時代初めの混乱期を経て、それぞれが独自の歩みをするようになります。【鎌倉時代中期から室町時代初期】

(4) 室町幕府の下で千葉氏と本拠の移動

室町時代も一貫して下総守護を務め大きな力を保ちましたが、関東地方の権力争いに巻き込まれ、千葉胤直は一族の馬加康胤らに滅ぼ

されました。馬加千葉氏は、本拠を本佐倉城(酒々井町・佐倉市)に移し新たな千葉惣領家となります。滅ぼされた胤直の甥である実胤・自胤は武蔵に逃れ武蔵千葉氏となり、馬加千葉氏と対立関係になります。【室町時代初期から中期】

(5) 戦国期も下総を死守した千葉氏

戦国期に入ると、房総半島南部で戦国大名の里見氏などが勢力を強め、下総に勢力を伸ばし始めました。彼らに対抗する必要から千葉氏は小田原を本拠とする有力な戦国大名の北条氏と同盟関係を強め、下総の支配を保とうとしました。しかし次第に北条氏の支配下に組み込まれていくことになりました。【室町時代後期】

(6) 豊臣秀吉全国統一 ついに千葉氏も滅亡

全国統一を進める豊臣秀吉と対立関係となった小田原北条氏は、1590年にその攻撃を受け戦いに敗れます。北条氏に従っていた千葉氏も運命を共にすることになりました。千葉氏の領地は没収され、約400年にわたる下総の支配者としての歴史は、幕を閉じることになりました。最後の物領家当主は重胤でした。【安土桃山時代】



わしが死んでからの千葉氏は、当時世界的に力をつけていた元の襲撃(元寇)や、幕府内での争いをきっかけに分裂をしていったのじゃ。それぞれの土地で力を持ったのじゃよ。

千葉氏ゆかりの主な都市

■宮城県亶理町・涌谷町

[武石氏(亶理氏→涌谷伊達氏)]

この地を舞台にした山本周五郎の小説「縦ノ木は残った」に登場する伊達安芸宗重は、千葉氏の系譜を受け継ぐ人物。



(涌谷城跡)

■佐賀県小城市

[九州千葉氏]

九州の小京都と言われ、「祇園祭」や「ようかん」が有名。



(祇園祭)

常胤は息子たちとともに源平合戦や奥州合戦に参加し、その功績によって、北は東北から南は九州まで、全国に領地を獲得しました。千葉六党と呼ばれる常胤の息子の息子は、領地を分割して引き継ぎ、それぞれが本拠として領地の地名を名乗りました。千葉氏はその後も、分家を繰り返すなどして、全国各地に広がっていったのです。



■福島県相馬市・南相馬市 [相馬氏]

国指定重要無形民俗文化財「相馬のまおひ」が有名。



(相馬野馬追)

■岐阜県郡上市

[東氏(遠藤氏)]

日本三大盆踊りの一つ「郡上踊り」が有名。



(郡上踊り)

■東京都板橋区・足立区・台東区など [武蔵千葉氏]



(赤塚城跡)



日本全国に広がった千葉氏の領地には、今も歴史が感じられる場所があるのじゃ。機会があったらぜひ行ってみておくれ。

氏中かりの場所

千葉市の市章と千葉氏

千葉市の市章は千葉氏の月星の紋章からとったものです。千葉氏の紋章は月星・九曜星の両方が使われていますが、この月星に千葉の「千」を入れて、大正10(1921)年に、市になったことを記念して市章としました。



二十五里岩 (東寺山町)
高品城跡 (高品町)
曾場鷹大明神 (貝塚町)

神明社

- ①猪鼻城跡
 - ②お茶の水
 - ③七天王塚
- 東禅寺 (亥鼻)

加曾利城跡 (加曾利町)

若葉区

城山城跡

栄福寺 (大宮町)

平山城跡 (平山町)

生実城跡 (生実町)

小弓城跡 (南生実町)

智光院

胤重寺

羽衣の松 (市場町)

土気城跡 (土気町)

緑区

大椎城跡 (大椎町)

④千葉寺 (千葉寺町)

④千葉寺

中央区千葉寺町161

市内最古の寺院です。火災で失われたものを、常胤が再建し、千葉氏の信仰を受けたとされています。この境内にある瀧蔵権現は代々の千葉氏の祈願所の一つであり、当主の元服の時に武運長久を祈願していました。



①猪鼻城 (千葉城) 跡

中央区亥鼻1-6-1

常重が本拠地を大椎から亥鼻付近に移して以来、千葉惣領家の胤直が滅ぼされるまで、この付近に千葉氏の城があったと伝えられています。当時の城は今のような天守閣の建物ではなく、櫓や平屋の建物であつたと考えられています。



②お茶の水

中央区亥鼻1-6-1

数々の言い伝えを残す泉です。千葉一族は代々この水を使用し、赤ん坊を入浴させる水に頼朝が戦いに敗れて房総に渡り千葉に来た際に、お茶をささげたという伝説が残っています。現在は湧き出ておらず、記念碑が由来を伝えています。



③七天王塚

中央区亥鼻1丁目他

千葉氏の妙見信仰に関係して、7つの塚が北斗七星の形に配置されていると言われています。塚の上には災いや、はやりの病をしずめる「牛頭天王」がまつられています。



ちばし の こ ちば 千葉市に残る千葉

⑧ 大日寺

稲毛区轟町2-1-27



第2次世界大戦前まで、
神社の隣にあった大日寺は、
戦後稲毛区轟町に移転し
ました。境内には、千葉家
累代の墓碑と言われる石塔
が並んでいます。

⑦ 白幡神社

中央区新宿1-19-4



昔は結城稲荷と言われてい
ましたが、源頼朝がこの
地を通過するときに、神社
の境内に源氏のシンボルで
ある白旗を立てて戦の勝利
を祈願したと言われていま
す。このことから、白幡大
明神と名
が改めら
れたと言
われています。

⑥ 千葉神社

中央区院内1-16-1



千葉氏の先祖、平忠常が
建てたと言われています。
千葉の妙見信仰の中心的な
役割がありました。千葉神社
にある月星紋などは千葉氏
の紋章の一つです。源頼
朝が鎌倉へ向かう途中、千
葉一族と一緒に参りした
と言われます。

⑤ 君待橋

中央区港町4-16



寒川大橋近くの小川に「君
待橋」という橋がかかって
いました。常胤が源頼朝
をここで出迎えたという説
があります。





「常胤つねたねの大功たいこうにおいては、

生涯しょうがいさらに報謝ほうしゃを尽くすべからざる」

源頼朝みなもとのよりとも

常胤つねたねの大きな功績こうせきには、生涯しょうがいをかけても報むくい切きれない。

平成30年5月発行

マンガ：小山規（漫画化伝説）

印刷・製本：第一資料印刷株式会社

千葉市・千葉市教育委員会

問合せ：千葉市総合政策局総合政策部

都市アイデンティティ推進課

〒260-8722 千葉市中央区千葉港1番1号

TEL：043-245-5660 FAX：043-245-5476

この冊子は、諸説ある中でさまざまな資料を参照し、総合的に判断して作成しました。
本書の一部または全部について、無断転載を禁じます。